

## 日本語の共鳴による表現

加藤透

(日本語発声共鳴研究会)

当研究会は日本語の音声共鳴について 30 年間、その研究を続けてきたが、内容には次のようなものがある。

日本語の音声は、日本人同士でも聞き取りにくい、と言われている。特に、舞台での音声は、音は聞こえるが言葉がわからない、との批判が多い。外国人は「あった」と「なった」の区別がつかない。ナ行の子音“n”が鼻腔に共鳴していないことが原因である。そこで、のどの奥で響く音を顔面に共鳴させること、特に「ぶん」や「なにぬねの」を用いた“n”の鼻腔共鳴に焦点をあてて実験を行った。実験に際し、私たちは言葉の高低を音符に置き換え、独自の方法を作成した。

声優・俳優はもちろん、歌う方、司会者、アナウンサー、リポーター、営業マン、さらに手術後の反回神経麻痺の患者さんたちも、よい声になり、職場復帰した例も 10 件以上あり、某国立大学教授で外科医の N 博士は、論文を医学雑誌に発表した。

つまり発声練習には、「ぶん」「なにぬねの」を使うことで、のどに力が入らず、顔面に響く声になり快適な会話、セリフ、歌がよくなるのである。このことを多くの方へ伝えたい、と考え、発表に応募した次第である。